ISSN 1884-7730

安曇野ちひろ美術館
美術館だより

No.98

2019.4.23

信州花フェスタ2019開催記念　ちひろ・花とともに生きて

●2019年5月17日(金)～7月16日(火)

主催：ちひろ美術館、信濃毎日新聞社
特別協賛：株式会社ジャクエツ、協賛：小野谷機工株式会社

「子どもも花も大好き」と語っていた画家いわさきちひろ。花は子どもと同様、生涯を通じて描き続けたテーマでした。

その暮らしのなかには、常に花がありました。花はちひろの心と創作を支えた大切なもののひとつだったといえます。

本展では、花と過ごしたちひろの暮らしと、花の表現の変遷を紹介します。

花を飾る―終戦後の暮らしのなかで

疎開先の信州で終戦を迎えたちひろは、翌年、27歳のときに単身、焼け野原となった東京へと戻ります。宮沢賢治のように土とともに生きるか、東京で画家としての道を模索するか、悩んだ末の上京でした。上京後の自身の姿を描いた素描のなかの１枚「顔をおおう自画像」（図１）には、机に上半身をもたれ、大きな手で顔を隠すちひろの姿が描かれています。周囲にはイーゼルや絵の具、筆などの画材が置かれているほか、小さな瓶のようなものに挿した野の花が飾られています。

図１　顔をおおう自画像　1947年ころ

家庭に花を絶やさなかった母・文江の影響もあり、ちひろの暮らしは幼いころから花に彩られていました。終戦後のものの少ない時代でも、小さな花を飾る自画像には、常に傍らに花を置き、慈しむ心を持ち続けた、「ちひろの花」の原点が映しこまれているように感じられます。

花で彩る―下石神井の家で

1952年の春、33歳のときに、ちひろは東京都練馬区下石神井に小さな家を建てました。この年、ちひろは、チューリップや菜の花、水仙、カーネーション、コスモス、椿、フリージアなどの花のスケッチをたくさん描き残しています。親子３人での暮らしへの喜びと、ちひろの満たされた気持ちが伝わってきます。亡くなるまで過ごしたこの家と、ここで過ごす時間をちひろは愛していました。庭に紫陽花や梅、桃の木を植え、池では蓮の花を咲かせました。

1950年代から60年代半ばにかけて、ちひろの仕事の中心だった絵雑誌にも、庭で育てていた花々が登場しています。

バラにかくれる子ども　1972年

チューリップのなかのあかちゃん　1971年

図２　「あまやどり」　1958年

「あまやどり」（図２）には、葉っぱの裏で雨宿りする蝶と蟻を覗き込む子どもたちの手前に、紫陽花が大きく描かれています。季節ごとに庭に咲く花を見つめ、ちひろは絵のイメージを広げていたのでしょう。画面を構成するモチーフとして花が登場し、花や葉のひとつひとつを丁寧に描写しているのが特徴的です。

花に託す―増築したアトリエにて

1963年、ちひろは夫の両親と同居するため、自宅に２階を増築します。それまで居間の一角にあった仕事場を２階の１室に移しました。部屋のなかには鉢植えの花が飾られ、窓からは、家の南側につくられたバラ棚を見下ろすことができました。この年は夫・善明が衆議院議員選挙に初出馬した年でもありました。

生活も環境大きく変わるなかで、ちひろの花の表現も変化を見せていきます。

図３　スイートピーとフリージアと少女　1963年

同年、ちひろは雑誌「子どものしあわせ」の表紙絵を描き始めます。「子ども」を題材とすること以外は制約がなく、自由に描くことができたこの仕事に、ちひろは「やっと舞台と出会った気がする」と語り、意欲的に取り組みました。

創刊号で描いた「スイートピーとフリージアと少女」（図３）は、画面の左右から登場した花が、少女の顔と重なり合っています。物語の説明や情景としてではなく、花と子どもそれぞれを独立した存在として描きながらも、二つのモチーフが呼応し、互いの心情を語り合うちひろの「花と子ども」の世界観が表現されています。

1972年、ちひろは激化するベトナム戦争への反戦の思いを込めて、「こども」と題した３点の絵を発表しました。これを機に、絵本『戦火のなかの子どもたち』が生まれます。「冬のアトリエの紅一点」であるシクラメンの花のなかに、ベトナムの子どもたちの姿が重なって見えたのでしょう。冒頭の頁には、ちひろが書いた詩とともに、赤いシクラメンの花に浮かび上がる子どもたちの顔（図４）が描かれています。

図４　シクラメンの花のなかの子どもたち　1973年

若い時代に人間のいのちや尊厳が奪われる戦争を体験したちひろは、「戦場にいかなくても戦火のなかでこどもたちがどうしているのか、どうなってしまうのかよくわかる」とのことばとともに、「ベトナム戦争のなかであれだけ子どもがさわやかに笑っているというのも不思議ですね、本当に自然のすばらしい生命力があるんですね」とも語っています。束の間の時間を懸命に咲く花に、戦火に散っていった子どもたちのいのちを重ねて描き出しています。

「花と子どもの画家」と称されるちひろが描いた花々をご覧ください。

（宍倉恵美子）

ちひろ美術館コレクション展　列車でいこう！

●2019年5月17日(金)～7月16日(火)

主催：ちひろ美術館、信濃毎日新聞社
特別協賛：株式会社ジャクエツ
協賛：小野谷機工株式会社
協力：鉄道博物館

図5　西村繁男『がたごとがたごと』（童心社）より　1999年

図6　同左

「列車：旅客・貨物の輸送のために仕立てられた車両の一つらなり」（『辞林』三省堂）。蒸気機関車が最初に走行したのがイギリスで1804年、日本で初の鉄道は1872年に新橋―横浜間に開通しました。蒸気機関から電気へ、と技術の進化を受けながら、列車は今も国を超えて利用されています。絵本にも列車は時代を超えて登場するテーマのひとつです。

本展では、ちひろ美術館コレクションから列車を描いた作品をとりあげ、５つの章にわけて紹介します。

汽車

図1　岡本帰一　汽車　1920年代

大きな黒い車体、蒸気の吹き出す音、石炭の香り、汽車を初めて見た人はどんなに驚いたことでしょう。岡本帰一は、子どものための絵雑誌「コドモノクニ」や「コドモアサヒ」などに子どもの絵を中心に描き続けた画家ですが、蒸気機関車を描いたこの作品には、時代の最先端の乗りものへの憧れに似た気持ちが感じられます。トンネルから出てくるその姿は、重々しくスピード感と迫力に満ちています（図１）。

ポーランドのユゼフ・ヴィルコンが描く絵本『ボンコ』には、バイソンのボンコが動物園から逃げていく道の途中で出会った蒸気機関車が、遠景から描かれています（図２）。線路の先にバイソンを見て慌てて停止した汽車のブレーキの蒸気や、機関士の驚いた顔まで丁寧に描かれ、画面からは、警告する汽笛音まで聞こえてきそうです。ヴィルコンの父親は鉄道員であったということもあり、汽車や鉄道には、どこか特別な想いがあったと想像されます。

図2　ユゼフ・ヴィルコン（ポーランド）『ボンコ』より　1969年

路面電車―停車場で待つ

韓国の絵本『かあさんまだかな』の主人公の男の子は寒い冬空の下、路面電車の停車場でひとり母親を待ちます。電車が到着する度に、「ぼくのかあさんは？」と運転手にたずね、その度に「知らないねえ」という返事とともに、路面電車は過ぎ去っていきます。男の子を含め、電車をじっと停車場で待つ人々と、来ては行く電車の対比が印象的です。画家のキム・ドンソンは、この絵本の核心のひとつを「待つこと」ととらえ、男の子の退屈した気持ちを、停車場の場面では単色の線描で表現したと語っています（図３）。

図3　キム・ドンソン（韓国）『かあさんまだかな』（フレーベル館）より　2004年

地下鉄―消えた切符

同じく韓国のシン・ドンジュンの絵本に登場するのは、ソウル市の地下鉄３号線。ホームから乗り換えのために移動する人たちは、よく見ると、紙の切符をコラージュしてつくられています（図４）。

図4　シン・ドンジュン（韓国）『地下鉄は走ってくる』より　2003年

今ではソウルの地下鉄では紙の切符は廃止されてしまったため、裏に磁気テープの線が入ったこれらの切符はもう存在しませんが、そのシャープでどこかユーモラスな形が、都市の賑やかな地下鉄のホームのようすをうまく表現しています。

『がたごとがたごと』

列車は、乗せた人々をある場所から別の場所へ移動する、旅の乗りものでもあります。その神秘と楽しさを同時に表現しているのが、西村繁男の『がたごとがたごと』（童心社）。『やこうれっしゃ』（福音館書店）に次ぐ彼の電車絵本であり、作家内田麟太郎との初めての共作でもあります。文章は「おきゃくがのりますぞろぞろぞろ」「がたごと　がたごと」「おきゃくがおりますぞろぞろぞろ」の繰り返しのみ。そのシンプルなテキストとは反対に、絵は細部まで描きこまれており、降りてくる客たちをよく見ると、乗ったときと何かが違う……列車は、時や次元をも超える手段だったのです。（図５、６）

不思議な電車

電車は、画家たちの想像力を得て、思いもしなかった形に変化することがあります。そんな、不思議な電車が登場する絵本を最後にご紹介しましょう。

図7　井上洋介『でんしゃえほん』（ビリケン出版）より　2000年

『でんしゃえほん』は、タイトルのとおり、電車がページごとに登場する絵本ですが、こんな電車があったらいいな、という作者や私たちの願望が投影されています。例えば「かぶとむしでんしゃ」。よく見ると、かぶとむしの触覚に電線がつながっており、目はランプで足の先には車輪、なかにのっている子どもは虫取り網を持っている、と完璧です。井上洋介の電車への愛を感じるのは、自由な線でありながら、乗客、運転手、つり革など電車の各要素にも注目して描いているからです。

列車絵本の数々をお楽しみください。

（松方路子）

〈活動報告〉2019年３月16日（土）
ベビーカーでお出かけしよう！ファーストミュージアムデー

安曇野ちひろ美術館では、０歳から２歳の子どもとその保護者を対象に、2017年から「ファーストミュージアムデー」を開催しています。「わが子の美術館デビューはちひろ美術館で！」という方はもちろん、赤ちゃんを美術館に連れて行ってもいいのかな？子ども連れだと展示はゆっくり見られない……というご家族にも安曇野ちひろ美術館を楽しんでもらいたい、とプログラムを組んでいます。おばあちゃんも一緒に親子３代で参加してくださる方もいて、今回は８組21名でのにぎやかな会になりました。

○美術館を楽しもう

簡単な説明のあと、全員で展示室へ。抱っこ紐やベビーカー、歩き始めた子などさまざまななか、「自分の子どもが何に興味を持ったか、よく見てみましょう。」「子どもの指さしがあったら、それについてお話しするのも楽しいですね。」と伝えると、さっそく「○○ちゃんはネコちゃんが好きだもんね！」といった親子の会話も聞こえてきます。

子どもたちの一番人気は、渡り廊下にある「シデロ　イホス」。バチをにぎり、たたいて音が鳴ると、みんなニコニコ。「（バチを）かして。」「どうぞ！」と、子ども同士のコミュニケーションも自然に始まりました。

プログラム後半のおはなしの会は、絵本の読み聞かせ、わらべうた遊び、ふれあい遊びの３本立て。子どもとふれあい、コミュニケーションする時間を楽しみました。今回参加者の半数以上が初来館。これをきっかけに、子どもと一緒に楽しめる場所として美術館に気軽に来ていただけることを願っています。（松澤理佳）

〈活動報告〉2019年１月23日（水）～２月17日（日）
インドネシア　子どものおはなしフェスティバル：日本とインドネシアの絵本展

１月23日から２月17日まで、インドネシアのバンドン工科大学にて、インドネシアで初となる「子どものおはなしフェスティバル（TaCita Pesta Cerita Anak）」が開催されました。そのプログラムのひとつとして、当館は、日本とインドネシアの絵本画家の作品の展覧会（助成：国際交流基金アジアセンター）を開催。また、当館コレクション画家の村上康成、出久根育の２名の画家が招聘され、ワークショップを開催しました。（田邊絵里子）

展覧会

バンドン工科大学は、ジャワ島第３の都市バンドンにある歴史ある国立大学。展覧会は、学内にある Soemardja ギャラリーにて開催されました。インドネシアの画家35名35点の複製画といわさきちひろを含む日本の絵本画家10名30点のピエゾグラフを展示。オープニングセレモニーは会場を埋め尽くすほどの方が来場くださり、絵本への興味の高さが伺えました。

出久根育トーク＆ワークショップ

トーク「絵本制作―私の試み」では、子どものころに好きだった絵本やどのような子どもだったのか、そのことが絵本の制作にどんな影響を与えているのかを、いくつかの絵本をとおして、丁寧に話してくださいました。あたたかなお人柄あふれるトークに、会場いっぱいにつめかけた参加者たちは、引き込まれました。

マスタークラス「民話と遊ぶ」は、絵本を学ぶ学生や卒業生を対象とした１日のワークショップ。３つの民話（インドネシア、日本、ロシア）からひとつ選んで、表紙と最も印象的な場面を描きました。35名が参加、真剣に取り組んでいました。

（上）トークをする出久根育さん（右端）
（下）学生に指導する出久根育さん

村上康成トーク＆ワークショップ

創作の裏話や約20年前にバリ島（インドネシア）で描いた絵本の読み聞かせ、ウクレレの演奏と楽しいトークに会場内は笑いにつつまれました。

村上康成さんと作品

ワークショップの課題は、黒い大きな紙を好きな動物に切り抜き、その動物が生きるために必要なものをそのなかに描く、というもの。命の大切さに触れ、子どもたちが伸びやかに描く姿が印象的でした。

このほかにも、当館スタッフによるブックトーク「インドネシアのトットちゃん」、「ちひろの水彩技法体験」を開催しました。

毎週月～水のスクールデーには、地元の子どもたちを招き、ギャラリーツアーが開催され、日本の絵本の読み聞かせも行われました。会期中、50近いイベントが開催され、約2100人の方が足を運んでくださいました。今後も、インドネシアとの交流を深め、双方の絵本文化の発展につなげていければと思います。

ひとこと ふたこと みこと

9月22日（土）
昔、祖母がここのお土産にと、ちひろのハンカチをくれました。幼かった私はそれを失くしてしまいました。私に似ていたから、といって選んでくれたハンカチのことを、時々思い出します。
（33歳　女）

10月6日（土）
国語の教科書の表紙で拝見していました。小学校時代、ワクワクして教科書を開いた気持ちを思い出しました。（ゆき）

11月29日（木）
東京駅でのいわさきちひろ展に先月行き、安曇野にも…と、10年ぶりに訪れました。ちひろさんのやさしい色づかいと子どもの表情が大好きです。谷川さんの詩とも合っていて、大変感動しました。

12月15日（土）
何回か来ていたけれど、この間来た時に、ちひろさんの誕生日を知り、私といっしょなので、感動しました。生誕100年のお祝いなのでぜひ来たいと思っていました。実現出来てよかったのですが…、バースデイケーキ完売にガッカリ。食べたかったなぁ―っ‼

3月18日（月）
ネコはネコでも、さまざまなネコがたくさんいて、想像を広げてくれます。この美術館だけでも、たくさんの絵本があったけど、この世の中には、もっとたくさんの絵本があると思うとワクワクします。（小学生　Saya）

3月21日（木）
小雨のなかで。トットちゃんファンの私には幸せな時間でした。トモエ学園の「あなたは本当はいい子なんだよ」の校長先生のことばは、子育てのとき、大きな支えになっていたことを思い出しました。

3月31日（日）
昔から猫が好きです。あの手ざわり、仕草が思い出されるような、かわいい猫がいっぱいです。久しぶりに猫をなでたくなりました。
―武生公会堂記念館ピエゾ展より―

12月21日（金）
昨日は、前進座のお芝居『ちひろ』を拝見しました。ちひろの若い頃の日々を知ることができ、すばらしかったです。東京のちひろ美術館にも行ったことがあります。実際に使用されていたアトリエを見られて幸せでした。ちひろが武生で生まれてくださったことが本当にうれしいです。（貴代）

美術館日記

2月22日（金）☼
2019年春の展示は、ねこづくし。これにあわせて「にゃん・にゃん・にゃん」で「ねこの日」の今日から、美術館公式 Instagram で「うちのねこ展 on Instagram」を始める。安曇野ちひろ美術館の公式アカウントをフォローし、ハッシュタグ「＃ちひろ美術館うちのねこ展」をつけて、ご自慢のねこの写真を投稿してもらう企画。ＳＮＳ上でのイベントは初めての試みだが、美術館や展示について知る機会を増やすことで、ねこ好きな方や、ＳＮＳを利用する方の来館につながるとうれしい。

3月2日（土）☼
安曇野ちひろ公園で開催されたキャンドルドリームにあわせて、美術館も８時まで開館延長。「にじみのキャンドルシェードをつくろう」ワークショップでつくられたキャンドルに火がともされると、参加者からは歓声があがった。日が落ち、指先がかじかむほど冷え込むなか、公園に散りばめられたキャンドルの明かりで、心あたたまる夜となった。

3月24日（日）☼
「まつかわ花咲きまつり」にあわせて、トットちゃん広場に花で地上絵が描かれた。花が咲いている村づくりの会や、安曇野ちひろ公園サポート隊のメンバーが集まり、約１万２千株のパンジーのポットを配置してつくられた力作。美術館は長野県民入館無料デーでもあり、たくさんの人が集まり、撮影を楽しんだ。パンジーの直売とともに絵が解体されると、惜しむため息がもれた。

3月28日（木）☂のち☂
昨年より安曇野市が導入している「安曇野シェアサイクル」の利用が始まった。市内外にある９ヵ所のステーションで、自由に自転車に乗ったり、返却したりすることができる。安曇野ちひろ公園もステーションに登録された。サイクリングや美術館へのアクセスのひとつとして利用してもらいたい。

風

Vol.2

旬なできごとをピックアップしてお届けします

４月25日から６月16日まで「第36回全国都市緑化信州フェア　信州花フェスタ２０１９～北アルプスの贈りもの～」が開かれます。催しのひとつとして、メイン会場である信州スカイパーク内のやまびこドームにて「みて、ふれて、つくって　いわさきちひろ・花とあそびの庭」が５月25日から６月16日まで開催されます。

ブース全体は、ちひろの作品がプリントされた高さおよそ３メートルの布パネルで囲われ、まるで絵本のなかにいるかのような空間を演出。どこにいても、ちひろの描いた鮮やかな花々が視界に飛び込んできます。

なかでも目玉は、花の印象的な作品を、実物の花や緑とコラボレートし、立体的に再現したもの。代表作「はなぐるま」は、造花を載せた手押し車が用意され、作品のなかの子どもたちと同じ構図で写真撮影を楽しむことができます。

そのほか、ブース中央にはトラフ建築設計事務所が企画設計した帽子型のワークショップテーブルが設置され、自由にワークシートに取り組めるほか、週末には水彩技法ワークショップも行われます。

はなぐるま　1967年

ちひろが生涯をかけて描き続けた「花」は、「子ども」と同じように、愛し、慈しむ対象でした。花に命を託して描いたちひろの作品には、子どものしあわせや平和への願いが込められています。花と緑にあふれた、ちひろの「花とあそびの庭」をぜひお楽しみください。

最新情報は、公式ウェブサイト（http:shinshu-hanafesta2019.jp/）をご覧ください。（畔柳彩世）

INFORMATION

●次回展示予定　2019年7月20日(土)～9月30日(月)

主催：ちひろ美術館、信濃毎日新聞社
特別協賛：株式会社ジャクエツ
協賛：小野谷機工株式会社

〈展示室1・2〉ちひろ・アンデルセンの世界

いわさきちひろ　おやゆび姫　1973年

ちひろは、日本でも古くから愛され、馴染み深い世界の童話の数々を手がけています。人の世の美しさ、悲しさ、現実をも映し出したアンデルセンの作品は、ちひろが強く心惹かれ、繰り返し描いた童話で、その画業の一端を形成しています。本展では、今も読み継がれるアンデルセンの童話を描いた作品を展示。多くの画家が筆をとった童話をちひろがどのように描いたのか、その創意工夫の足跡を紹介します。

〈展示室4〉〈企画展〉童画の国のパイオニアたち
―日本童画家協会の7人―

清水良雄　なはとび
1932年

大正から昭和にかけて、「子供之友」「赤い鳥」「コドモノクニ」などの芸術性の高い絵雑誌が数多く刊行されました。その黄金時代を支えた画家たちは、児童文学の挿し絵ではない一芸術ジャンルとしての「童画」を確立すべく日本童画家協会を設立し、互いに競い合いながら、子どものためのイラストレーションを描きました。本展では、日本童画家協会を結成した岡本帰一、川上四郎、清水良雄、武井武雄、初山滋、深澤省三、村山知義の作品を紹介し、彼らが目指した「童画」を展覧します。

〈展示室3〉ちひろ美術館コレクション展　世界のおはなし
〈展示室5〉絵本の歴史

安曇野ちひろ美術館　イベント予定

各イベントの予約・お問い合わせは、安曇野ちひろ美術館へ。TEL.0261-62-0772
詳細・最新情報はホームページからもご覧いただけます。chihiro.jp

〈初夏の展示関連企画〉　花のドレスコード特典

会期中、花をモチーフにしたものを身につけて来館された方には、もれなく、ちひろの花のポストカード（非売品）をプレゼントします。

〈初夏の展示関連イベント〉

●5月19日（日）ちひろの花めぐり

会場：安曇野ちひろ美術館～安曇野ちひろ公園
参加費：無料（入館料のみ）申し込み：要事前予約（HP、TEL にて）

●6月1日（土）ワークショップ　花を楽しむ

開催中の展示「ちひろ・花とともに生きて」のギャラリートークと、季節の生花を使ったアレンジメントを楽しむワークショップです。
講師：木下いずみ（hanaizumi 主宰）
申し込み：要事前予約（HP、TEL にて）

●6月15日（土）、7月6日（土）
電車の教室でおはなしの会

時間：各日11：00～
会場：安曇野ちひろ公園
　　トットちゃん広場　電車の教室
参加費：無料　申し込み：不要（参加自由）

●6月9日（日）
鉄道好き集まれ！鉄道博物館の方にきいてみよう

鉄道博物館（さいたま市大宮区）から専門家をお招きして、開催中の展示「列車でいこう！」の作品のスライドなどを見ながら、列車にまつわるお話を伺います。質問タイムもありますので、ぜひふるってご参加ください。
時間：13：30～14：30　講師：鉄道博物館　学芸員
参加費：無料（入館料のみ）　申し込み：要事前予約（HP、TEL にて）

●おはなしの会

毎月第２・４土曜日11：00～
（参加自由、入館料のみ）

●ギャラリートーク

毎月第２・４土曜日14:00～ちひろ展、
14：30～コレクション展
（参加自由、入館料のみ）

●5月18日（土）国際博物館の日

この日ご来館のみなさまは、入館無料になります。

●5月25日（土）ちひろが愛した安曇野・まつかわ
北アルプスパノラマウォーク

主催：松川村観光協会　協力：安曇野ちひろ美術館

©松川村

ちひろが松川村の風景を描いたスケッチポイントや、馬羅尾高原に点在する遺跡などをめぐるウォーキングイベントです。松川村の地元ガイドによる案内や、美術館スタッフによる解説も。リンゴジュースや軽食のふるまいなどもあります。北アルプス連峰が水田に映り込む「水鏡」の絶景が楽しめる８㎞のウォーキングコースをお楽しみください。
時間：９：00～13：00
参加費：ひとり1000円（保険料含む）　定員：80名
申し込み：要事前予約（松川村観光協会ＴＥＬ．0261-62-6930にて、５月17日〆切予定）

●近隣市町村入館無料デー

日ごろの感謝を込めて、近隣市町村にお住まいのみなさまへ向けたご優待日です。※受付にてご住所のわかるものをご提示ください。
６月９日（日）池田町・生坂村民入館無料デー
６月16日（日）大町市民入館無料デー
６月23日（日）松本市民入館無料デー

●館外での展覧会情報　丹波市立植野記念美術館（兵庫県）
開館25周年記念展　ピエゾグラフによるいわさきちひろ展

期間：2019年４月13日（土）～５月19日（日）
　　10：00～17：00（入館は16：30まで）
　　※月曜休館（４/29、５/６は開館、５/７は休館）
観覧料：一般500円、大学・高校生300円
　　中・小学生200円

母の日　1972年

CONTENTS　〈展示紹介〉信州花フェスタ2019開催記念　ちひろ・花とともに生きて…❷／ちひろ美術館コレクション展　列車で行こう！…❸／〈活動報告〉ベビーカーでおでかけしよう！ファーストミュージアムデー／インドネシア 子どものおはなしフェスティバル…❹／ひとことふたことみこと／美術館日記／風…❺

美術館だより　No.98　発行2019年4月23日

安曇野ちひろ美術館

〒399-8501　長野県北安曇郡松川村西原3358-24　テレホンガイド0261-62-0777　TEL.0261-62-0772　Fax0261-62-0774